

このすば I F ～カズマがチートを選んだら～

にやるめす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カズマがもしチートをもらっていたらという話

目次

第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
56	50	40	29	19	9	1

第1話

「ねー、はやくしてー? どうせ何選んでも一緒よ。引きこもりのゲームオタクには期待なんかしてないから、なんか適当に選んでさくつと旅立つちゃって。なんでもいいから、はやくしてーはやくしてー」
「オ、オタクちゃうし……っ! 出かけて死んだわけだし、引きこもりでもないから……っ」

小さな震え声で言い返すが、アクアは自分の髪の毛をいじらながら、俺には全く興味なさげに

「そんな事どうでもいいからはやくしてー。この後、他の死者の案内が、まだたくさんあるんだからね?」

いいながら、アクアはスナック菓子をポリポリと……。
……こいつ、初対面のくせに人の死因思い切り笑ったり、さつきからちよつとばかし可愛いからって調子乗りやがって。
アクアの投げやりな態度にカチンときた

はやくしてー欲しいか?

ならそうしてやるよ。

異世界に持っていける “もの” だろ?

「……なら、あんた」

言いかけてやめた。

異世界にこいつ持って行ってもロクなことにならない気がする。

謎の勘がそう強く訴えている。

それはもう凄まじいまでに。

圧倒的なまでに。

異常なまでに。

呼吸が荒くなるほどに。

動悸がするほどに。

落ち着け、冷静になれ佐藤和真。俺の死因はなんだ? 盛大な勘違いによるショック……ここはこらえて素直にチートを頂こう。

「……これはなんだ?」

アクアから渡されたカタログの中から、気になった一つをたずね

る。

「ん？それは、職業『真の冒険者』とスキルポイント25のセットね。真の冒険者は、どんなスキルも必要スキルポイントの二分の一でしゅとくできる超レア職業で、ステータスの伸びも高いわ。ごくごく……スキルポイントのおまけは、この職業はレベルが低いと最弱職の冒険……はむっ。しやとたいしてかわらなゴツクン……いから、すぐに死なないための保険よ。」

「しゃべる途中で飲み食い始めんのやめろ」

なんかただのクズ女にしか見えなくなってきたなコイツ。

「うーん」

……にしても、どんなスキルでもか。

魔王に職業やステータス、スキルポイントという単語から大体レトロRPGのような世界観であることは予想づいた。

しかし、実際に異世界を見たわけではない。

下手な魔剣や聖剣、怪力や俊足の力よりこれを選んだ方が無難な気がする。

「ねーこれでいいの？いいわよね？ほら、転生の準備するからさっさと立ちなさい」

……人の言葉を待つ気ねーなこいつ。

こんなのが本当に女神なのか？

「わかったよ。ほら、立ったぞ。」

言われた通りに立つと、俺の足元に青く光る魔法陣があらわれた。

「佐藤和真さん。あなたをこれから異世界に送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には神々からの褒美として、どんな願いでも一つだけ叶えてあげます。」

……どんな願いでも？

そうか、そうか。

いいことを思いついた。

「なら、その暁にはお前を俺の奴隷にしてもらおうわ」

「……ぷーくすくす。あんたみたいなヒキニートが魔王を討伐できるわけないじゃない！あなたバカなの？ほんとのほんとにバカ

なの？いーひひひひ。あつごめんなさい。あなたの死因は……
ぷーくすくす」

「はっ そんな風に笑っていられるのも今のうちだぞ？俺は本気だからな！お前の泣きわめく姿が目には浮かぶようだ！」

「やれるものならやって見せなさいな、どうせすぐに死んでしまうに決まってるわ」

「んだとコラー！よし決めた！お前はただの奴隷じゃなく性奴隷にしてやる！」

そんなバカなやりとりをしながら俺は明るい光に包まれた

光に包まれ異世界転生した後、俺は異世界の光景に圧倒されたり、親切な人からギルドまでの道を教えてもらい、何とかギルドに到着して、ギルドの受付嬢に冒険者についての説明やスキルなどの説明を受けたりした。そして

「真の冒険者?!え、うそ?!しかも初めからスキルポイントがこんなに……」

待ち望んでいた展開が来た。

巨乳できれいな受付嬢のルナさんは、俺の冒険者カードを手に驚いている。

「あの、そんなに強い職業なんですか？」

そんなの知っているがわざわざ知らない振りをして聞く

「ええと、強いというより、これは非常に珍しい職業ですね。何せ同じ職業の人は、五十年前に亡くなって以来現れていませんから。」

あれ？ちよつと違う。・・・いや、確かあの生意気女神はレアとは言ったが、強いとは言ってなかった気がする。

「あ、でもちやんとこの職業は強いですよ！どんな職業のスキルでも二分の一のスキルポイントで取得可能な上に、レベルアップによるスキルポイント取得量は、運が良ければ2ポイント増えることもあります。その上ステータスの伸びもかなり良いです。スキルは、本職の人たちのように職業補正はありませんから弱くなりますが、それでも基礎ステータスが良いので実際の効果は誤差の範囲に収まります。し

かも、和真さんは幸運が非常に高いですし、初めからたくさんのスキルポイントを持っているので、もしかしたら魔王討伐も可能かもしれません。」

アクアから聞いてない情報があったがまあいい。

「じゃあこれにします。」

「分かりました！では真の冒険者……つと。冒険者ギルドへ、ようこそサトウカズマさん。スタッフ一同、今後の活躍を期待しています！」

こうして俺の異世界生活がはじまった。

一週間後、俺は日本の常識が通じない異世界で苦勞しながら日当制の仕事をして金を稼ぎ、転生特典として預かったらしい金も使って、ショートソードと魔法用の杖を購入した。

現在俺が持っているスキルは、気のいい戦士と、重戦士、モンクから教えてもらった「剣」と「剛力」に「回避」のスキル。

最後に「中級魔法」のスキルだ。

街中での攻撃魔法は禁止されているが、運よく街中で「中級魔法」を連発する光景をみる機会があったから習得することができた。

ちなみに、おれの今のステータスは貧弱なので、杖を使用しても2発撃てれば良い方だが今は気にしない。

使用したスキルポイントは合計で7, 5。中級魔法には5も消費したが、憧れの魔法を取得できたので、よしとする。

さて、なんで俺がこんな話をしているのかと言えば、俺は今、*「ジャイアントソード」* 五匹の討伐依頼を受け、郊外の平原に来ているからだ。

期限は三日で、敵は大きいらしい。

が、どうせただのカエルだ。せいぜい体長1メートルが限度だろう。そんな敵に、スキルで強化された俺が負けるはずがない。

しかも金属を嫌うらしいので、ショートソードを持っていれば大丈夫。

チートも持っているのだから一人で十分だ。

ろうと思う。……いや、

「……何にも、できなかった。」

おそらく俺は、あのカエルを簡単に倒せていたのだ。それだけの力はあった。

スキルを発動せずに勝てたのだから。

けれども俺には無理だった。

強い力を手に入れて、有頂天になって、調子に乗って一人でクエストを受けた結果がこれだ。

「なさないなあ・俺」

呆然と空を眺める。

空は暗くなつた俺の心とは対照に青々と明るい。

……なぜだろうか？急にあの、青い髪の糞女神をおもいだした。

この空をみていると、人の気持ちを考えないあいつが「ぷくすくす」と、俺をバカにしているような気がしてならない。

……頭の中で何かがぶちぎれる音がした。

「やってやんよ。糞女神！ おまえをこの地面に這いつくばらせてやっからなー！」

俺は、再び立ち上がり、次の獲物を探し始めた。

「はー 生き返るー！」

俺は今、アクセルの町の大衆浴場で体をあらっている。

あの後俺は、ちゃんとスキルを使いながら戦えるようになった。

一日で、五匹のジャイアントトードの討伐に成功し、ギルドに報告して11万5000エリスの報酬をもらった。

途中でレベルが上がりステータスが上昇したことが、一日でクエストを完遂できた要因だろう。

自分ではつきり分かるくらいに身体能力が上がったことが分かった。

「……にしても、まさかあんなにカエルがでかいなんてなあ」

ここは異世界なのだと改めて実感する。

そういや、カエルがあの大きさだとほかの生き物たちはいったい……考えるのやめよう。

怖すぎる

「お、お前新参者のカズマか？。聞いたぞ、一人でジャイアントトード五匹つぶすなんてお前なかなかやるな。」

一人異世界の生物に恐怖を覚えていると、後ろから声をかけられた。

後ろを振り向くと、くすんだ金髪が特徴のダストという青年がいた。

文字通りゴミのような男で、よく軽犯罪をしては警察にお世話になってるらしい。

事実として俺は三日前に、この男が街中で酔った勢いに魔法使いの女の子を犯そうとし、その反撃に中級魔法を何度もくらわされている光景を目撃している。

その光景をたまたま見たおかげで俺は中級魔法を覚えることが出来たのであるが……いろいろとなんか、ひどい。

と言うか、

「……もう釈放されたのか」

こいつは先ほどの強姦未遂で逮捕されていた気がする。

「ん？牢屋の中でギャーギャー騒ぎまくって飯をたかりまくってたら、すぐに出してくれたぞ。」

………ひどすぎる。

「て、いうかなんで俺のことしってたんだ？」

ダストが聞いてくる。

「街であんたのことを、知らない人なんてほとんどいないと思うぞ。」

コイツの名前は一日に一度は聞く。

「たしかに俺は名の知れた冒険者だな！はははははは」

悪評で。

その後俺たちは、いろいろと話しをして気が合いすぐに友人になっ

た。なぜすぐに友人になれたのかという疑問が翌日に湧くが、同じくズだからということに気づくのは少し先のはなしだ。

第2話

「よし」

気合を入れる。

平原で、少し離れたところに5匹のジャイアントソードが群れているのを発見した俺は、右手にショートソード、左手に魔法用の杖を構える。

そして、

「剛力」

俺は一時的に筋力を跳ね上げるスキルを発動させる。

その後詠唱をして、

「ライトニング」

「ギユエ!」

俺の放った一条の雷魔法は、2匹のカエルを貫いた。

どうやら上手くいったようで動く気配はない。

残ったカエル達は驚いたようであたりを跳ね回りですが、俺を発見するとすぐにこちらへ走り出す。しかし、

「はっ」

俺はすでに奴らに向かって走り出している。

奴らとの距離がすぐに縮むと、一番手前の一匹に向かって高く跳躍。

そのカエルの頭に向かい、剛力によって強化された腕でショートソードを振り降ろした。

この一撃で生きてられるほど、頑丈に出来ていないのは知っているので、着地とともに、すぐさま至近距離――2メートルも無い――にいる二匹のうち一匹に同じように叩き込む。

直後に残った一匹が、舌で俺の体をぐるぐるに巻きつけてくるが、杖は手放してない。

だから、

「フリーズ」

カエルの舌の根元に向け、強めに初級魔法の冷気を放つ。するとカエルは舌の拘束を解きその場で暴れだした。もちろんそんな隙を見逃すはずもなく、容赦なく右手のショートソードを振り降ろした。

《冒険者仲間募集中！中級職以上の前後衛を一人ずつ求めていきます。

パーティーは現状自分一人ですが、職業は「真の冒険者」で、剣に中級魔法や回復魔法、他にもいくつかのスキルが使えます。スキルポイントがかなり余っているので、要望次第でそのスキルも取ろうとおもっています。是非声をかけてください。 カズマ》
「これでよっつと」

俺は書き終わったパーティーメンバー募集紙をギルドの掲示板に張り付けて、ギルドの酒場にある一席に座る。

ジャイアントトードに殺されかけてから5日が過ぎた昼ごろ。

カエル討伐を毎日そして、今朝もこなしていた俺は、もう少しレベルの高いクエストを受けようと考え始めた。

理由は単純で、俺が強くなったからだ。

実際に、中級魔法は一日のうちに、結構な回数を打てるようになった。

お金はかかったが、「ヒール」と「受け身」それから今朝の戦いで使った「初級魔法」のスキルを教えてもらい、覚えることもできた。しかし、俺には一つ問題があった。

それは、この世界についてジャイアントトード以外の知識がほとんどなく、いつまた死ぬような目に合うか、分からないことだ。

情報自体は、本やギルドの受けつけで手に入るが、現実とのイメージに差があつたり、見たことのないものに驚いてしまったりすることは少なくない。

元の世界を基準にした判断で、通じなかったこともある。(ジャイアントトード然り、サンマは土から生えること然り)

冒険の最中にまで、それにいちいち振り回されたくはない。

よって仲間を募集することにしたのだ。

募集要項が中級職以上且つ人数が少ないのは、大人数のパーティーではいろんなスキルを持つていても自分の価値がないからだ。

少数精鋭型のパーティーなら、自分の汎用性の高さを生かせると思う。

「にしても、いろいろ変わったなあ俺。」

酒場の椅子にもたれながら、ふと思った。

引きこもりだった俺だが、この異世界に来てから完全に引きこもりしなくなっている。

ぼろい宿を一応とっているが、夜に寝て、ちよつとした荷物を置くくらいにしか使っていない。

「ねえ、」

あと、筋肉もついた。この世界に来てから体を動かしまくってるおかげだろう。

仕事をするこの大変さも分かった気がする。

「ねえ、聞いているの？」

服装もジャージではなく、三日前に購入した、この世界のものを着用している。

「そういや、元の世界ではい」

「ねえってばー!」

「あーjんどcふあ!?!」

一人考えていると、耳元で大きな声が出た。

俺は突然のそれに驚き、椅子ごと体を倒してしまう。

倒れた体を起こそうとすると、目の前に満足そうにした銀髪いけm・・・女の子の顔があった。

「やつと気づいてくれたね。」

ボーイッシュな女の子は、短めの髪を揺らしながら微笑んでくる。

もっと別のものが揺れて欲しかったが、絶壁に近いそれは揺れるはずもない。

でも、へそ丸出しの軽装から分かる美しい肌や体つきは高ポイント

だ。

「ねえ、初めて会った人間にそのあからさまな視線は止めてくれないかな」

おっと、ばれていたらしい。

素直に舐めるような視線をやめて立ち上がる。

「で、あなたはいったい?」

「ん?あたしはクリス。職業は盗賊、パーティーメンバー募集の紙見せてもらったよ。」

「!ということ、はいつてくれるn」

「いや、実は私じゃないんだ。今ここにはいないんだけどね、あたしの仲間の子がパーティーメンバーを探してるんだ。それで前衛の枠を少しの間、空けていてほしくて頼みに来たんだよ。」

なるほど、そういうことか。

「わかりました。そういうことなら構いませんよ。 :あれ?クリスはその子とパーティー組んでないんですか?」

「組んでるよ2人で。けど私はちよくちよく用があるから、残念だけどいつも組んであげることが出来ないんだ。それにこれから少しの期間忙しくてあえないし。あ、あと私に敬語はいらさないよ。」

「わかったよ。じゃあクリス、その子はいつ来れそうなんだ?あと名前と職業も気になるから教えてくれ。」

仲間になる奴の情報は気になる。 . . . いや、確定はしてないけど。

「ああ、いいよ。名前はダクネス。女の子で職業はクルセイダー。あと5時間もすれば来ると思うから。」

なるほど? . . . !!

「クルセイダーって、騎士の上級職の、あのクルセイダーか!」

RPGでは強い職業だったのでこれは期待できる。

何が何としても仲間にしよう!

「そ、これ以上は本人が来てからのお楽しみにしてね。」

「了解です」

なんて今日はついてるんだろう!

あれか？俺の幸運の高さのおかげか!?こんな感じですがすぐに強い仲間が手に入るのか!?

もしかすると俺はこの幸運の高さで、魔王討伐も本当に出来ちゃうのか!!?!

そんな風に浮かれていると、クリスが何か言いたげにこちらを見ていた。

「どうかしたのか?」

「・・・えつと君って『真の冒険者』だよな」

「ああ、そうだけど」

「実はさ、盗賊のスキルをダクネスを待ってくれるお札に教えたいんだけどさ・・・」

「・・・なんだと!」

「ぜひお願いしますなんでもいいのでいっぱい教えてください!」

「えっ!?でも盗賊のスキルはスキルポイントが1か3必要なものが多いから、君の必要スキルポイント半減の効果が活かせないんじゃない?」

「?・・・!そういうことか。」

クリスはどうやら、俺のスキルポイント半減の能力はスキルポイント1の物には適用されず、3の物では2になると考えているのだろう。

しかし違う。

「大丈夫だぞ。必要スキルポイントの数値が奇数でも、小数点がついて効果はちゃんと発揮されるから。1ポイント必要なら0.5ポイントになるだけだぞ。」

「えっ、嘘!そんなのありえないよ!」

有り得てるんだが・・・

「・・・そんな変なことなのか?」

「だって、『真の冒険者』の能力でそんなことできるはずがないですし!絶対にありえないよ!」

「・・・あれ?」

「落ち着けクリス。口調おかしくなったぞ」

「あっ」

クリスは顔を赤くさせて、急に黙り込んでしまった。
もしかして、

「素は敬語なのか？」

「ち、ちがうよそんなわけないじゃんなにをいつているんだいカズマ?!」

最後の俺の名前以外無駄に棒読みな上、早口だったのでごまかしているのはバレバレだ。

「無理はしなくてもいいのですよ、おそらく、盗賊職だから敬語は似合わないとかお思いになって、そんな口調にしたのでしよう。クリスさん、早く楽になりませんか？きっと女神エリス様も、あなたが無理をなさる姿を望んでいませんよ。」

「望んでる！絶対に望んでるから！」

あわてるクリス。

俺はその肩に手を置き、

「……………無理してたんだな。」

「違うから—————っ！」

☆☆☆☆

街の中の、人の少ない幅広の道。

俺は今、ここでクリスに盗賊のスキルを教えるてもらっている。

俺はひとしきりクリスをからかった後、謝罪としてクリムゾンビアーを一杯おごり許してもらい、その後再びスキルを教えるもらう話に戻ったのだ。

しかし、未だ俺の必要スキルポイントが少数単位で半分になることを信用してくれていなかったたので、試しに「逃走」という、ポイント1のスキルを教わり、冒険者カードに記載された未取得スキル一覧の中をみせてやると、驚愕の表情を浮かべていた。

それでもなかなか納得しようと思わず、同じくスキルポイント1の「潜伏」「気配遮断」「敵感知」のスキルを次々に教わり習得したが、やはり0.5という必要スキルポイントは変わらなかった。

「次は窃盗を教えるから」

クリスは諦めず1ポイントのスキルを教えってくる。

「なあクリス、俺の能力ってなんか問題あるのか？」

「え？」

「だって、そんなに焦って認めようとしないうし、あり得ないだのなんだのいってるし。」

「文献ではカズマみたいに小数点がつくなんてこと書いてなかったからだよ。」

クリスは存外にあっさりと答える。

が、

「でも真の冒険者って、俺がなるまで50年間は現れてないんだろ？その文献が間違ってるんじゃないのか？」

情報は都合のいいように伝わるものだ。

その文献が正しいことを記載しているとは限らない。

文明レベルが中世止まりのこの世界の文献を、この世界の住人はそこまで信用しているものだろうか？

「そ、そうかもしれないね。」

クリスは頬の傷跡をひっかきながら目を泳がせている。

・・・あやしい

「じゃあ、文献が正しかったとしたら、なんでそう認めようとしないうだ？俺の場合たまたまそうだったってことになるよ、何か不都合でもあるのか？」

「えっと、そんなことはないけど・・・あつそうだ！ねえバインドってスキル覚えたくない？」

「話題を変えんな」

絶対に何か隠してるなこいつ。

額から汗が流れ出してるし、

「あの、その・・・これ以上は聞かないでくれると嬉しいな」

言葉を少しの間考えていたクリスだが、とうとう観念したのか、誤魔化すのをやめた。

「・・・クリスの知っていることは俺にとって」

「大丈夫だよ。カズマにとって不利益になるようなことじゃないか

ら。・・・だから、」

「分かった。これ以上は聞かないよ」

「はあ、よかった。君って案外頭が良いんだね。」

「案外って失礼だな。こう見えても俺は、ネトゲで名を馳せたことのある男だぞ？ 巨大パーティーの幹部として、手にかかる奴らを必死にまとめた俺からすればこんなの朝飯前だぜ。」

決して運よく勘が働いたとか、運がよかったとかそんなのではない。

「ねとげ・・・？ よくわからないけど、カズマがすごいのはわかったよ。じゃあ改めてスキルを教えるね。」

クリスは俺のほうに片腕を向けて、

「ステイルっ」

瞬間、俺のズボンの右ポケットが軽くなる。

そして向けられていた片腕には、

「あ！俺の財布が！」

「そう、これがステイル。相手のものをランダムに一つ奪い取るスキルだよ。幸運が強い人ほど良いものを奪い取りやすくなるから、カズマには最適のスキルじゃないかな？」

なるほど、確かに最適だ。

「それじゃあ、あたしから財布を奪い返してみなよ。本当に運が良ければ、あたしのダガーが盗れるかもね。」

48万エリスもした業物らしいそれを、自慢気に見せつけてくる。

俺は冒険者カードを操作して「窃盗」を習得。

そしてクリスにむけて右手を突出し、

「ステイルっ！・・・ってなんだこれ？」

クリスから何かを奪ったっぽいのが、自分の財布でもダガーのような硬い感触でもない。

俺は自分が握りしめた、温かくてちよつと湿ったそれを広げてみると、

「おおっ！ 当たりも当たりっ大当たりだーーーーー！」

「キヤーーーーー！ パンツ返してーーーー！」

「イイイイヤツハツ……!」

純白のパンツをかかげ、何度もそれを振り回す。

これほどの幸せがこれまでの人生にあっただろうか? いや、ない。

「パンツ振り回すのやめて……!」

クリスが目に涙を浮かべながら訴えてくる。

……さすがに良心が

「やめて欲しかったら、金を払ってください。」

痛む。

けれど仕方ない! 仕方ないんだ!

俺の体はこの喜びを表したくってしょうがないんだ!

悲しいけど、辛いけどっ! せめてお金をくれないとこの衝動は治ま

らないんだ……っ!

「分かった! 分かったから! えとえーつと、いくら払えばいいのっ!」

「自分で決めてください。」

なんて良心的なんだ俺はっ!

価格を相手に決めさせるなんて、文明化社会では早々ありえないっ

「そ、そんなの無理だよ!」

「ならやめな」わかった! 有り金全部あげるからやめて……っ

るよ」

クリスから有り金を巻き上げ、ついでに自分の財布を返してもらっ

た俺は、パンツを振り回すのをやめる。

……っであれっ

「なにその手?」

クリスはパンツを返せとばかりに右手を出している

「なにつて、お金あげたんだからパンツ返してよお。」

泣き顔で訴えてくるが、

「俺は振り回すのをやめるっていっただけで返すなんて言ってない

ぞ。」

「えっ」

絶望で染まった表情でこちらを見てくる。

「あの、どうすれば返してくれますか?」

あつ、素が出た。

「なら二つ頼めるか？」

クリスは絶望で染まった表情をそのままに首を縦に振る。

「じゃあー1つ目は、何としてもお前の仲間のダクネスを俺の仲間にするよ。」

「えっ？」

予想したものと違ったのか、クリスは表情をもとに戻し首をかしげる。

「2つ目は、お前が忙しくなくなったら、俺のパーティーに入ってダクネスとも一緒に冒険者をするよ。これができるんだったら返して・・・ってうわっ」

「ありがとうっ」

クリスはそういつて泣きながら抱きついてきた。

「・・・ってあれ？俺って今、自分で追いつめて慰める的なことやってた？」

あつれー？これも俺の幸運のおかげか？

その後、俺は泣いて抱きついてきたクリスを落ち着かせてパンツを返し、雰囲気でクリスの金も返した。

そして、ことが終わった頃にはだいぶ時間が経っていたので、2人でギルドに帰った。

クリスが妙にくつついてきたから、帰路は恥ずかしかった。

俺はこれから、クリスに頼んだ2つのことによって後悔するのだが、それを今は知る由もない。

第3話

それは、俺とクリスがギルドに戻ってすぐのこと。

ダクネスというクルセイダーが来る予定の、30分前のことだった。

「あなたが真の冒険者カズマですね。募集の張り紙見させていただきました。」

ギルドに入り、近くの席に座ると早々に、12〜3歳くらいの小さな女の子にそう声をかけられた。

紅い瞳に眼帯が特徴的で、魔法使い然とした恰好をしている。

「ふっふっふ、この邂逅は世界が、いや宇宙が選択せし定め。私はあなたという存在を待ち望んでいた!」

女の子はバサツとマントをひるがえし、

「我が名はめぐみん!アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操りし者・・・っ!」

.....?」

「えっと.....」

「ふっ、余りの強さ故、世界から疎まれし我が禁断の力を汝は欲するか?」

.....ほほう?」

「ならば、我と共に究極の深淵を覗く覚悟をせよっ!人が深淵を覗くとき、その深淵もまた、人を覗いているのだ。」
なるほど。

「冷やかしはけっこうです。」

「ち、ちがわいっ!」

「.....!!もしかしてその瞳、君は紅魔族かい?」

突然のことに動揺していたクリスが口を開く。

「いかにもっ!私は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん!我が必殺の魔法は岩をも砕き、山をも崩す。真正正銘、人類最強の攻「なあクリス、紅魔族って一体なんだ?」って話を止めないでください!」

ごめんね。

君の自己紹介よりクリスの説明の方が、君のことを理解できると思うんだ。

「え、えーっと、紅魔族は一族の全員が高い知能と魔力を持って、生まれながらにしてアークウィザードになるための素質がある。つまり、魔法のエキススパート達なんだよ。あと……」

クリスは少し悩み、

「……個性的な感性をもった人たちなんだよ……」

「おい、その女装した変態！ 私たち紅魔族の高尚なセンスについて言いたいことがあるなら聞こうじゃないか！」

……なるほど。

このめぐみんとやらについて、ようやく分かった。

頭がおかしいだけで、こいつは今まで本当のことを言ってたのだから。

変な名前や名乗りも、大真面目だったに違いない。

……フツ

「あ、あたしは真正銘の女なんだけど！」

「嘘をおっしゃらないでください！ あなたの名前は『クリス』でしょう？ クリスは男性名で、女性に使われることはありません！」

「ムキーーーーッ！」

「この世界の神様は、患者に毒を与えるのか。」

言い争っている二人をよそに、思ったことをつぶやく。

産まれたときの中二病軍団全員に、アークウィザードの素質を与えるぐらいだ。

きつとロクな人間には、凡才しか与えないのだろう。

「神様をバカにすることは許さないよ、カズマー！」

「なぜかすごくバカにされた気がするの私の勘違いでしょうか!？」

二人がこちらに方向転換してきた。

「うるさい！ 俺の知ってる女神は、見た目だけで中身すっからかんのクズ女だ！ ああ思い出しただけでもイライラする！ どうせ幸運の女

神エリスもギャンブル狂いか何かだろ！自分の幸運をいいことに、札束片手に高笑いしながら豪遊してるに決まってる！そんな奴の世界だから無駄な奴に無駄な才能与えてんだ！」

「君が言うような神様なんてほとんどいないよ！あと、女神エリスは普通の神様だよ！」

「おい。最後の言葉は聞き捨てなりませんね！ここであなたの言う無駄な才能を発揮してあげましょうか!？」

「「「す・い・ま・せ・ん！」」」

大声で言い争っている、ギルド職員の方々がやってきた。それはもう、最高に怖い笑顔で。

「今は4時。日の明るいうちは一般の方々も来られているんです。そこまでの大声で騒ぐのなら、日が沈んでからにしていただけませんか？」

！
職員の一人が言うてくる・・・って、やばいやばい目が笑ってない

「「す、すみません」」

3人みんなで頭を下げる。

ギルド職員達は、きちんと謝ったら許してくれたようで、それぞれの持ち場にもどっていった。

あれだけ騒いでた俺たちだが、一気に静かになる。

・・・沈黙が苦しい。

「・・・なあ、めぐみん。お前ってその、強いのか？」

とりあえずこれは破る。

会話が完全になくなってしまう。

「えっ？あつ、はい。我が爆裂魔法の前では、例え上位悪魔ですら致命傷はまぬがれないかと。」

「まじか？」

「マジです。並大抵の敵なら話にすらならないでしょう。ですので、私を仲間に入れてください！」

「そんなに凄い奴なら、もちろんオーk「ちよつと待って、」なんだよクリスマス。せつかく仲間に入ろうとしてくれるのに。」

「君、ちまたで噂の爆裂狂だよね？」

爆裂狂？

「あの、その不名誉なあだ名について詳しく聞かせてもらえませんか？」

「爆裂魔法を一発使って倒れる紅魔族が、いろんなパーティーに声をかけているって噂になってるよ。爆裂魔法だけしか使えない地雷だから、そんなあだ名がつけられるんだよ。」

クリスは弱冠、怒気を孕んだ口調で言う。

……ん？

「ちよつと待て。めぐみん、一発使って倒れるってどういうことだ？」

「……我が爆裂魔法はその威力の絶大さ故、消費魔力もまた絶大。要約すると、魔力切れで身動きがとれません。」

「その上、スキルポイントがすごく高いし、発動の爆音のせいで近くのモンスター達がやって来るっていう、完全なネタ魔法なのさ。」

なんだと？

それじゃあ、全く使えないじゃないか。

めぐみんは爆裂魔法をネタ扱いされて怒っているが、どうでもいい。

この子、要らない。

「……やっぱりめぐみんには、もつと別の場所に居場所があると思うよ。」

そう丁重に言いかけてやめる。

確かこいつは、自分の魔法は人類最強の攻撃手段だとか言ってた。

もしかすると、糞女神を泣かせながら犯すという俺の願い、つまり魔王討伐には欠けてはならない存在なのではないのだろうか？

「もうどこのパーティーも拾ってくれなそうにないのです！荷物持ちでもなんでも見捨てな」

「良いよ。お前今日から、うちのパーティーメンバーの一員だ。」

魔王討伐のため、こいつにはとにかく爆裂魔法関係にスキルポイントを費やしてもらおう。

「本当ですか!？」

めぐみんはとても驚いた表情で身を乗り出してくる。

「って、近い近い近い顔が近い！……あれ？女の子特有の良い匂いはどこだ？」

「う、嘘なんて言わないって、俺にはお前が必要なんだ！」

そういうと、めぐみんは喜びの感情一色に表情を染め、

「はあ♡、やはり私とあなたは運命という必然で結ばれていた盟友だったのですね！良いでしょう、我が力存分に振るってください！……はあ、ようやく私もパーティーに……」

大仰なポーズをとりながら言い放ち、最後には自分の世界に入っ

た。

でもまあ、

「よしっ」

とりあえず魔王討伐への第一歩を刻むことが出来た。

そう内心で思っていると、クリスが後ろから肩を叩いてきた。

「ねえカズマ、いいのかい？あたしも彼女を見捨てるようなことはしたくないけど、……でも」

そうクリスは小さな声で聞いてくる。

ちようどめぐみんに聞こえない程度の声で。

「いいんだよ。めぐみんはいぎという時の切り札にすればいいだろ？モンスターをおびき寄せるデメリットも、逆に考えれば、モンスターをおびき出す手段になる。それで倒れたら、モンスターの餌にすればいい。なんだかんだメリットが多いんだよ。ほかのパーティーに取られないうちに、引き込むべきだと思うぜ？」

俺も同じように小さい声で返す。

「なるほど……って！流石にモンスターの餌にはしないよね？」

「うん。おとりとして活用するだけだ。」

「少しでも君のことをいい人だと思ったあたしの純情を返して！」

あ、クリスからの好感度が少し下がった気がする。

「二人とも何を言い合ってるのですか？」

クリスが声を荒げたせいで、喜びに浸っていためぐみんに気づかれ

た。

「いや、クリスにお前の利点を伝えてただけだ。変なことはいってないよ。」

クリスがなにか言いた気だが、気にしない。

「そうですか。そういえば、このクリスという女性とはいったいどういう関係なんですか」

「やっぱり女って、分かってたんだね!？」

ええ、でも最初は本当に男性に見えました。と、めぐみんが答える
と、クリスは結構本気で落ち込みだした。

「ああ、クリスは俺のパーティーの不定期メンバーなんだよ。職業は盗賊。でも今日入ったばかりで、互いのことはまだまだ分からないけどな。」

「そうですか。ではクリス、同じパーティーメンバーとして、これからよろしくお願いしますね・・・って、そこまで落ち込む必要ないと思うのですが?」

「ねえカズマ、めぐみん。あたしってそんなに女の子に見えないかな?」

あ、やばい。

言うクリスの声のトーンがすごく低い。

俺たちはこの後、クリスを立ち直らせるのに10分も費やした。

慰める中で、露出の高い恰好は、男と勘違いされないためだとかかった

・・・クリスに男ネタはほどほどにだな。

☆☆☆☆☆☆

「やあクリス、今日はやくそk・・・その人達は誰だ?」

「ああ実はね——

クリスを慰めて間もなく、噂のダクネスと思しき女騎士がやってきた。
見た目は凄く良い。

髪は金髪、長いそれをまとめてポニーテイルのようにしており、それでいて、顔立ちは凛々しく、目つきは少し冷たい。

俺より少し背が高いから、170センチくらいだろうか？その長身と鎧が、これらととてもよく似合っている。

———ということなんだよ。」

「・・・本当なのかそれは？また途中でパーティーから放り出される気がするのだが、私は。」

「・・・！しかも男口調か。」

クール系美女、こいつは女にモテるな。

しかしそれだけではない。

ダクネスはクルセイダー、つまり肉付きが良いのだ。

それがまた艶やかな雰囲気も醸しだしている。

格好よさとエロさを掛け合わせたような美しさには、きつと男も女も関係ないに違いない。

だって俺もめぐみん（爆裂狂）も軽く見惚れてしまったからだ。

「大丈夫だって、ダクネスは絶対にパーティーの一人として、ずっといられるから。」

「・・・分かった。」

どうやら話し合いは終わったようだ。

ダクネスはこちらに振り向き、

「えっと、わ、私はダクネス。クリスからは聞いていると思うが、クルセイダーを生業としている者だ。一応剣を扱ってはいるが、…………その、不器用すぎて攻撃が全く当たらないのだ。」

自己紹介を？…………コイツ今なんていった。

「だが耐久力には自信がある！なのでガンガン前に出ていくつもりだ！！是非こき扱ってくれ!!!どんなモンスター相手にも一歩も引かないことを約束しよう!!!」

興奮しながら俺の目の前でそう宣言して、顔が近い近い近い近い近い匂い！

でも唾飛ばすな！

ていうか、

「おいクリス、本物のダクネスさんと呼んできてくれ。この偽物はちやんと粗大ごみにして出すんだぞ。」

「いや、偽物もなにもk「んあっ!」……彼女がダクネスだよ」
……嘘だ。

攻撃当たらないなんて、ただの壁じゃないか。

そんな聖騎士認めない!

というか、俺のさっきの言葉で興奮しなかったかコイツ?

「カズマひどいですよ。彼女の不器用さについてですが、誇張して全く当たらないと言ったのではないのですか?」

……確かにそうだ。

自分の実力が高い奴ほど、高みを知っているが故、謙遜するようになるものだ。

もしかすると、とんでもないモンスターに一度攻撃を避けられまくったが故の

「誇張でもなんでもないぞ。ほら見ろ私の器用さを」

そう言っで見せてきた冒険者カードを俺とめぐみんはじつと見る。

そこに書かれた器用さの数値は

「……最低クラスじゃねーか!」

少しでも期待した俺の純情を返して!

「なあ、「大剣」とかのスキルは取ってないのか?」

取っていればここまで不器用なはずがない。

「もちろんとっていないぞ。スキルポイントはすべて防御系統のスキルにつき込んだ。そうでないと、気持ちよくモンスターの攻撃が受けられないからな。」

「今気持ちいいって言ったか?」

「いってない」

「いったろ」

「いってない」

「……今から攻撃系統のスキルを取る気は?」

「ない!」

断言しやがった!

「……というか、筋金入りのドM狂性駄亜だったのかこいつよし」

「お前要らな「カズマちよつといいかな?」なんだよクリス?」

いつの間にか少し離れたところにいた、クリスに呼び止められる。

「まあいいから、ちよつとこつち来てよ」

クリスは手招きをしながら呼んでいる。

もうダクネスの処遇については決まっているが、とりあえず向かう。

「なんだよクリス。あんなやつパーティーには要らないからな。」

「へー、そんなこと言っているのかいな?」

クリスは妖しい笑みを浮かべながら言う。

「……どういふことだ。」

「お昼に君が、あたしに言ったこと覚えてる?」

たしか、スキルを覚えてもらって………っあ!

「クリス、パンツもろうよ。」

「ちつがう!いや、あつてるけど!」

「?」

首をかしげる。

約束じゃあ、ダクネスを俺のパーティーに入れなければ、パンツは俺の物になるはずだ。

「分かってないみたいだね、なら教えてあげるよ。もしここで、カズマにパンツを取られるってあたしが大泣きしたら、周りの人たちはどんな目で君を見るのかな?」

「きつたねえ!お前それでも人間k「うわーっ!ん!カズマにぱんつ」よーし分かった!ダクネスは仲間に入れてやるからやめてください!」

慌ててそういうと、クリスにはやりと笑った。

こつ、こいつ!いつか泣いて謝るような目に合わせてやるっ!

そう決心しながら俺はダクネスのもとに向かう。

………本当にどうしよう。

攻撃が当たらなければ、例え「デコイ」のスキルを使ってもそう長

い間、モンスターを引き留めることはできない。

固くてなかなか倒れない上、攻撃が自分に当たる気配のない無害な奴相手に、そう何度も攻撃するほどモンスターだってバカではない。

それに、騎士職は総じて足が速くない。

いざ遠距離から魔法を放とうにも、剣などでモンスターを自分から離れさせることが出来なければ、走って逃げてでも追いつかれる以上、それも出来ない。

いくら固くとも、仲間ごと魔法を打てる訳がない。

クリスがパーティーにいる間なら、ダクネスが引き付けているモンスターを、途中で彼女に引き付けてもらって魔法を放つことも可能だろう。

だがクリスが抜けたら？

……俺はいつもの通り戦い、ダクネスにはめぐみんのお守りを頼もう。

それ以外はリスクのある作戦しか思い浮かばない。

いないよりマシなだけじゃん！

「はあ」

本当にどうしよう。

結局この日、ダクネスは俺のパーティーに入ることになり、パーティー結成祝いをして解散となった。

……ちつとも祝いたくない！

第4話

お祝いパーティーが終わった翌日。

俺たちは互いの実力を実際に見て知るために、「2日以内にジャイアントトード10匹討伐」のクエストを受け、デカイカエルが結構いるあの草原に来ていた。

まずリーダーである俺の実力が知りたいとみんなに言われたので、実力を見られるのは俺が1番最初になった。

めぐみんは、一撃打つと動けないので迷惑にならないよう最後がいい、と本人の希望があり、意見に答えてめぐみんは最後。

2番目はダクネスとクリスのコンビとなった。

ダクネスとクリスはパーティーを組んでいたため、二人でやりたいらしいのでそうした。

「よっし、じゃあ見とけよお前ら！」

こいつらに俺の雄姿をみせつける！

そう思いながら、俺は少し離れたところにいるジャイアントトード2匹に、右手にショートソード、左手に杖を持ついつもの装備で走っていく。

奴らも走ってくるこちらに気が付いたようで、巨体を揺らし、こちらに走り出す。

もちろんこっちは、何の策もなしに走っていない。

中級魔法の1つを詠唱しながら走っているのだ。

そして、だいぶ距離がなくなったころ詠唱は終わり、

「フリーズガスト！」

俺は向かってくる2匹を中心に、冷気を帯びた白い霧を発生させる。

通常より多くの魔力を込めたため、その範囲は広く、レベルの低い俺でも十分な威力を発揮する。

するとたちまち奴らの体は凍りつき、命はあるものの、身動きが全く取れなくなる。

そして俺は走った勢いをそのままに、一匹に喉元へのショートソードによる突きをくらわせる。

その後、残った一匹には凍った後頭部から、頭をかち割ってやった。
………なんかあつきり終わった

「カズマ、お前近接戦闘しながら魔法が使えるのか!」

戦いが終わってみんなの元に帰るとすぐに、ダクネスが興奮しながら聞いてきた。

「違うぞ?俺はそこまで器用なことはまだできない。ただ走りながら魔法が使えるだけだ。」

「にしても凄いよ。魔法使い系の人達は大抵魔力を制御するために速く走れないんだ、カズマみたいな速度は出せないよ。」

クリスが説明と共に言う。

「それは俺の職業のおかげだと思うぞ?俺の場合全ステータスの伸びが高いからな。」

俺は各上級職の中で一番伸びやすい項目の、一步手前くらいの伸びで各ステータスが伸びる。

魔法使い系とは身体能力に大きな差がある上、単なるウィザードより、魔法に関わるステータスの伸びは良い。

それだけ基礎に差があるのだから、このくらいできて当たり前だ。

………もとの俺のステータスはカス同然だけど。

「……少し羨ましいですね。」

するとめぐみんは、少し妬ましそうに俺の方を見てくる。

それに俺はどう反応すればいいか分からず、黙ってしまう。

めぐみんの場合、仲間に頼って初めて役に立つことが出来る存在だ。

なのに俺は、仲間に頼らず、自分一人でもできる力がある。

前衛、中衛、後衛、そのどこに立っても問題ない。

こいつからすれば、俺はきつと妬みの対象なのだろう。

「い、いや別にそんなつもりでは言ってはいないのです!ただちよつと羨ましかっただけで……だからその……そんな顔をしないでく

ださい」

そんなことを思っていると、いきなりめぐみんが謝ってきた。
「つて、えっ?」

「……俺、暗い顔してたか?」

「うん、ちよつと辛そうな顔になってた。君ってそんな顔ができたんだね?」

クリスがすこしからかうように言う。

「おい、それはどういう意味だ?」

「どういう意味も何も、言葉通りの意味だよ。君って単純そうだし」
言ってクリスはいやらしい笑みを……ッ

「おい、クリスちよつと来い。ステイールで裸になるまでひん剥いてやる!」

こいつにはお仕置が必要だ。

泣いて謝ったって許さない。

そんなことをおもっていると、クリスはきつきまでのいやらしい笑みとは違う、楽しそうな笑みを浮かべる。

「ふふふつ、君にはやっぱりその表情が似合ってるよ。辛そうな表情は似合ってるないね。」

えっ?

「クリス、もしかして……」

「はい、これで暗い空気おしまいっ!ほら、めぐみんもそんな顔しない。せつかくパーティー結成したばかりなんだからもつと楽しくいこうよ!」

クリスは活発そうな笑顔で言う。

……ヤバい惚れそう。

俺たちはこの後、クリスとダクネスの実力を見るために新たな狩場を求めて移動した。

移動の前、こつそりとめぐみんが「ごめんなさい」と俺に言ってきたので、こつちも気を遣わなくて悪かったと謝った。

……クリスはきつと、俺たちに暗い顔をして欲しくなかったのだ。

なら、さっきのことは無かったことにして、今からは普段通りにしよう。

俺はそう心に決めた。

……ダクネスは案外使えるかもしれない。

俺は、8匹のジャイアントトードを引き付けているダクネスを見てそう思った。

こいつのことだから、デコイでそこら辺中のジャイアントトードを引き付け、良いように遊ばれるだけだと思っていたのだが、

「はあっ！どうした、もつと激しく攻めないと私を凌辱することはできませんぞ！」

こいつは予想以上にカエルと奮戦している。

もちろん攻撃はほとんど当たっていないが、舌による巻きつけ攻撃を何度も力技で振りほどいている。

そこまで強い縛りでないとはいえ、こう何度も振りほどいて平然……じゃなく、興奮しながら振りほどいていられるようなものではない。

そして

「そこっ！」

ダクネスが引き付けている間に、クリスが短剣で切り裂いていく。

二人のチームバランスはとても良く、しばらくしているとジャイアントトード達を一掃した。

「どうだい？あたし達結構やれるでしょ」

クリスは戦い終わると、光景を見ていた俺たち2人の元に来て聞いてくる。

「凄いです！モンスターを一気に引き付けたダクネスも、それを鮮やかに倒していくクリスも本当に凄かったです！」

めぐみんは余程感動したのか、紅の瞳を光らせている。

「ああ、まさかダクネスがあそこまでやれるとは思ってもしなかった。」

モンスターの群れを発見した途端、奇声を揚げ突っ込んでいったときはドン引きしたが、結構戦えている(攻撃は当たっていなかったが)ことに素直に感心した。

「確かにダクネスは攻撃当たらないし、……モンスターの群れや強いモンスターに突っ込んでいく癖もあるけど、でも耐久力はこの国でもトップクラスだと思うよ」

力もかなりの物なんだ。と、自慢気に言ってくる。

……そういえば、

「なあクリス。あいつの体はどうなっているんだ？」

「えっ？それはどうい「私の体を弄びたい」といったか？」「言っていない」あ、ダクネス戻ってきたんだ。」

クリスと話していると、いつの間にかダクネスが戻ってきた

「なあ、お前ってどんな力と耐久をしているんだ？前に冒険者カードを見たときは、器用さ以外は手で隠していただろ？よかったら教えてくれないか？」

「嫌だ。」

……え？

「私も一応、淑女の端くれ。こういったものは他人に見せたくはない。」

「どこが淑女だこのド変態」

「はあうん！お、お前は仲間になったばかりの女に容赦ないな。……まあ、私はそれで嬉しいのだが。」

「初めて会った俺にその変態性を見せつけてきたお前に、容赦ないと言われたくない」

コイツのことは無視しようかな……無視しても、「放置プレイ……だど！ハアハア」とか言って興奮するに違いない。

何をしたらこいつは嫌がるんだろう？

そんなことを考えていると、今まで黙っていたためぐみんが突然口を開いた。

「そういえばダクネス、貴女はどうしてモンスターに抵抗したのですか？」

言うめぐみんに、ダクネスはきよとんとした表情を浮かべている。質問の意味が分からなかったのだろう。

「お前ならモンスターに抵抗なんてしないで、されるがままにしてそのなのに、なんで抵抗したのかって聞いたんだよ。」

「あ、そういうことか」

ダクネスは納得したように首を縦に振る。

「私はただモンスターにめちやくちやにされたいのではない。必死に抵抗するも力及ばず凌辱されたいのだ。だから抵抗してもなんらおかしくはあるまい?」

ダクネスは、それはもう真面目に答えた。

「……こんな怪力を凌辱できるモンスターなんているのだろうか?」

「ああ、納得しました。そういうことだったのですね。」
なるほどそういう訳でしたかと、めぐみんは頷く。

「いやお前にはまだ早い、納得すんな」

ロリツ娘が平然として理解して良い範囲を、超えている気がする。ロリツ娘はもう少し純粹にあるべきだ。

パンツをステイルしてやった時のクリスや、せめて今現在、ダクネスの変態ぶりに慣れているにも関わらず、苦笑いを浮かべているクリスを見習って欲しい。

胸は見習わなくて構わないけど。

「……今、何故か無性に腹が立ったのは気のせいでしょうか」

「あたしも何故かバカにされた気がするんだけど?」

おっと、鋭い。

でも考えていた内容だけにどう返答すれば良いものか分からず、助けを求めようと、ちらりとダクネスを見る。

「……そこには小さくてスレンダーな二人とは正反対の肉体があった。」

「そんなことないよ。ただ二人にはダクネスみたいに大きくなつて……って、あつぶね! 何すんだいきなり!」

いきなり殴りかかってきた二人に対し、運よく回避スキルが発動し

た。

クリスのストレートは顔面、めぐみんのアップーは股間のあつた場所を空振っている。

「なんで避けるんですか！素直に当たってくださいよ！」

理不尽な！

「ふざけんな！俺の股間狙ってたくせに何イってんの！」

「君の口には自制が必要なんだよ！その言い方だつてワザとだよね！」

「取り押さえましょう！そしてこの男をボコボコにするのです！ダクネス、貴女も手伝って下さい。」

「え、えっと、」

突然のことにダクネスは慌てふためく。

関係のない自分がどうすべきか迷っているようだ。

「おい、ダクネス！もしめぐみん達の手助けをしないと誓えるのなら、お前が泣いて謝るようすんごいことをすると約束してやる！」

「なん・・・だと・・・っ！・・・くつ、分かった。すまん、めぐみん、クリス。ここでお前たちに協力することは出来ないようだ。」

良し！

「最低だよカズマ！そんなこと言ったら、ダクネスが首を縦に振らない訳ないじゃないか！」

「ダクネス、貴女はクルセイダーなのでしよう！？甘言に惑わされてどうするのです！」

二人はそれからどうにかダクネスを仲間に取り込もうとするが、「カズマも仲間なんだ。多少の言葉は我慢してやれ」という、最も言葉で断ってくれる。

「ほら、二人ともいい加減落ち着けよ。仲間の悪言くらい見逃してやるべきだつて、ダクネスもいつているだろう？」

「元凶の君がそれを言うのかい？」

クリスは怒りを通り越してあきれ始めたらしく、口調に棘がなくなってきた。

「・・・はあ、しょうがないですね。」

めぐみんもとうとうダクネスの勧誘をあきら

「ダクネス、もし私たちに協力してくれるのなら、クリスと2人掛かりですんごいことをしてあげます！」

こ、コイツツッ！

「……悪いカズマ、私は彼女たちに協力せざるを得ないようだ。」
「卑怯だぞお前ら、それでも人間かよ!? ちよつとお前らの体つきに言っただけじゃないか！」

「それがいけないですよ！ダクネス、クリス一斉に取り押さえましょう！ 幾ら多彩なスキルを持っていたところで、この数に敵うはずがありません」

「分かったーじゃあ皆行くよー！」

クリスの合図に三人がいつせいに俺をとっ捕まえようと襲い掛かってくる。

右前にダクネス、中央にクリス、そして左前からめぐみんという具合だ。

ならばっ！

「逃走」

俺は正面からやりあうのは不可能と判断し、後ろに向かいスキルを使用して逃げるに徹することにした。

「……この男！」

なんか言っているが気にしない。

そして俺は、3人からある程度の距離がとれたことを確認すると魔法の詠唱を、魔力で強引に省き、

「フラッシュ」

「「きゃあああー……」」

突然の光に、みんな目を抑えてのた打ち回っている。

仲間にスキルを使うなんて頭おかしんじゃないのですか！とか、
クズマ、君は本当にクズマだよ！後でひどいからね！だとか、仲間に
対してこの容赦のなさ……たまらん！など言いたい放題言っ
てくれる。

流星に俺が悪いのは分かっているが、何もここまで言わなくていい

じゃないか。

仕方がない、ここは黙らせよう。

「ステイヤー」

「ごめんなさいカズマ様！」「私たちから下着を剥ぎ取り、辱めるつもりかっ！ハアハア」

「いや、お前からは冒険者カード」

「それだけは本当にやめてください。」

3人に俺をとっ捕まえるのを諦めさせ、めぐみんとクリスに一応謝った後。

俺たちは次の目的、めぐみんの爆裂魔法の威力を確かめに、廃城近くの山道に来ていた。

クリスがめぐみんの希望である「硬くて大きいもの」に該当するものを知っていると、彼女についてきたら、予想以上の物（廃城）が現れたことに、俺たち3人全員が驚いた

特に、めぐみんなんかは息を荒げ「あんなに大きくて硬そうなものに打ち込めるなんて♡」と、なんかもういろいろとヤヴァイ反応を見せてくれている。・・・やっぱりこいつもダクネスと一緒にか。

気が短い分、もしかしたらダクネスより酷いかもしれない。

「そう言えば、爆裂魔法を打てばモンスターがやって来るんじゃないか？なあクリス、敵感知があるとはいえ、こんな山道で打って大丈夫なのか？」

俺は疑問に思ったことを聞く。

「大丈夫だよ、ここいら一帯のモンスターは強くてもジャイアントトードがいいところだし、臆病な性格のモンスターが多いからね。爆音なんか聞こえたら、隠れて出てこないとおもうよ。」

「なるほど」

流石冒険者としての先輩だ。

いろんな情報を持っている。

「あの、もうそろそろ打って良いですか？もう我が爆裂欲の抑えが利

きません！」

めぐみんは目を紅く光らせながら、訪ねてくる。

「良いんじゃないか？今のところ、俺の敵感知に引つかかっているモンスターはいないし。」

めぐみんは俺の言葉を聞くと、ペアつと顔をほころばせる。

そして杖を構え、

「では、いきますー！」

めぐみんは、すうつと息を整え詠唱を始めた。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう。覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ！」

めぐみんが一言一句紡ぐ度、圧倒的な魔力が彼女から流れだし、杖に向かって集まっっていく。

俺は同じ魔法が扱えるものとして、めぐみんが驚嘆せざるを得ない魔力量と、魔力制御能力を誇っていることが分かってしまった。

間違いない、こいつは天才だ。

「踊れ踊れ踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり。万象等しく灰塵に帰し、深淵より来たれ！これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法、エクスプロージョン！」

瞬間、大爆発が起こった。

廃城の近くとはいえ、それでもそこそこ距離があるのに、爆風がこちらにまで伝わってきた。

これは間違いなく人類最大の攻撃手段といえるだろう。

たとえ魔王相手でも一発で勝てそうな大威力だ。

ダクネスは「・・・凄いな」と、本当に感心したようで、あの直撃を受けてみたい！と言うような変態発言が出ていなかった。

「ふっ気持ちよかったです。」

満足気に言っただけめぐみんは倒れた。

魔力切れによるものだろう。

「あの、すいません誰か、おぶって下さい。」

この後、俺はめぐみんを背負い、みんな揃ってギルドの元にまで帰

り、クエスト完了の報告をした。

死んでから時間が経っており、カエル肉が傷んでいたせいか30万エリスしかももらえなかったが、まあ今日のところはいいだろう。

帰路で、これからの冒険のことや、俺に覚えて欲しいスキルについて話し合ったことに、俺の冒険者生活が本当に始まった気がした。

第5話

「……………納得いかない。」

パーティー結成のあの日から数日。

クリスが用があつてしばらく抜けると言つた日の明後日の朝。

俺は今、めぐみんとダクネスとテーブルを囲み、ギルドの酒場で旨すぎるキャベツの野菜炒めを食べている。

なぜこれを食べているのかと言えば、昨日はキャベツの収穫祭だったからだ。

キャベツの収穫祭と言っても、畑から収穫するのではない。

捕獲するのだ。

……………まさに異世界クオリティーと言うべきか、この世界のキャベツは飛ぶ事が可能で、年に一度ありえないほどの大群でもって、誰もいない辺境の地目指して空翔ける。

そしてその道中、街を通り過ぎるその日を収穫祭というらしいのだ……………空飛んでまで食われたくないのなら、どつかで隠れてろよ。

「カズマカズマ、見てください！レベルが上がりました！」

そんなことを考えていると、キャベツを食べながら冒険者カードを見たいためぐみんが、向かいの席から自慢げに言ってくる。

「嬉しいのは分かるが、飯食いながら経験値溜まるのを見るのやめろ」
まったく、いくらキャベツが経験値豊富とはいえ、食事のマナーくらい守ってほしい。

でも本当にうれしそうな笑顔をするものだから、あんまり強い口調にもなれなかった。

……………強い口調?……………そういえば

「そういえばダクネスさんや、昨日は随分とお楽しみでしたね。見ましたよ、キャベツの捕獲そっちのけで、キャベツの大群の体当たりを、デコイまで使用して受けておられて……………ちゃんと稼げたんだろうな」

俺はドスの利いた声でダクネスに聞く。

パーティーメンバーにはそれぞれ一長一短がありどんな時に誰が役に立つかわからないのだから、クエストの報酬は参加したメンバーで完全折半にすべきと言うクリスの考えのもと、うちのパーティーでは報酬の完全折半制がとられている。

つまり収穫祭の際、思いつき欲望に走っていたコイツが稼げてないと、俺の報酬が大きく減ってしまうのだ。

「だ、大丈夫だ！その……結果的にたくさんの冒険者をキャベツの体当たりから助けていて、そのお礼にと、助けた冒険者たちから、幾ばくかの謝礼金を貰えたのだ。だからそこそこ稼ぐことは出来たと思うぞ。」

無論、初めは謝礼金を受け取ろうとせず断ったのだが、どうしても皆が言って仕方なく受け取ったのだと、ダクネスは騎士道精神からかそう付け加える。

と言うかもし受け取ってなかったら、俺はステイルでこいつの冒険者カードを奪い、筋力と耐久力の具体的な数値をギルドの皆に広めていただろう。

「あの、すいません。カズマがそんなことを聞いているのは、自身の報酬が減ってしまうことを恐れているからですよね。」

そんなことを思っていると、めぐみんが俺に聞いてきた。

「当たり前だろう？うちのパーティーは完全折半制だからな。」

「でもそれは、パーティーとして受けた場合の話ですよ。今回は緊急クエストでしたから、パーティーとしてではなく各自個人で受けたようなものなので、折半の対象にはならないはずですよ。」

あ、そういうえばそうだな。

今回はパーティーメンバーで協力してキャベツの捕獲をした訳ではない。

ならば今回自分で稼いだ金は、そのまま自分の物になるのが筋だ。「……なるほど。ありがとうめぐみん！お前のおかげで大金が手に入ったよ！」

「？……カズマはそんなに稼げたのですか、まあ口ぶりから察するに相当な額なのでしょうけど。」

「おう、400万ちよいだ。」

「よ、400万!?!」

2人は目を大きく見開き、身をずいっとこちらに寄せてくる……
というか、

「あの、……恥ずかしいから元の位置に戻ってくれよ。その……
近い。」

「あ、……すまない。」

「えっと……わかりました。」

俺の言葉に、2人は顔を赤らめて元の位置に戻る。

仲間になり、クエストの最中に肌が触れ合うことはそれなりにあった。
た。

めぐみんに関してなら、爆裂魔法の後は必ずおんぶするほどだし、
年も13で俺の恋愛対象の外だ。

なのに何故、こうしたふとした瞬間に意識してしまうのだろうか？

「……………」

無言が続く。

前にギルド職員達に怒られたそれとは少し違う、どこか甘い無言に
2人も俺もどうすればいいか分からない。

しかしその無言は、

「あ——っ！ヒキニート！」

……何故かいるクソ女神によってぶち壊された。

しかもやたら背が高い、日本人らしき黒髪ボブ美女を連れて。

「相川 愛さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸
にも亡くなりました。短い生でしたが、貴方は亡くなってしまったの
です。」

真っ白な部屋の中、私は唐突にそんなことを告げられた。

突然のことで何が何だかわからない。

部屋の中には小さな事務机と椅子があるだけで、他には何も無い。
ある……いや、居るとすれば私の人生終了を告げてきた、椅子

に座ってる女の子くらいだ。

もし女神と言うものが存在するのなら、きつと目の前の相手のことを言うのだろう。

テレビで見るアイドルの可愛らしさとは全く異なる、人間離れした美貌。

淡くやわらかな印象を与える透き通った水色の長い髪。

年は私より1つ下くらいだろうか？

出過ぎず、足りな過ぎずの完璧な体は、淡い紫色の、俗に羽衣と呼ばれるゆつたりとした服に包まれている。

その美少女は、髪と同色の透き通った瞳をパチパチさせ、状況がつかめず固まったままの私をじつと見ていた。

・・・私は、先ほどまでの記憶を思い出す。

部活から家に帰った私は、汗臭い体を洗うためシャワーで汗を落としていた。

部活は陸上部で、400と800メートルを専門にしている。

短距離選手並みのスピードと、長距離選手並みの持久力が必要になる種目故、長距離走よりもきついと言われることもあるのだ。

だから練習の後は大量に汗を掻く。

しかも、

「ワキガ持ちなんて、・・・はあ」

そう、私はワキガ持ち。

だからきつい練習終わりの腋の臭いは、それは酷い。

どのくらい酷いのかと言えば、腋の臭いを嗅げば、鼻をつまんで体をのけ反らせるほどだ。

でも、

「流石にシャワーを浴びたから、もう大丈夫よね・・・？」

ボディソープはまだだが、汗はひとまず落としたのだ。流石にそこまでひどくないよね・・・？

そう思いながら私はシャワーの水をとめ、立ったまま腋を嗅ぐ。

「・・・くっさっさ！！」

と言うか、

「私以外にもバカな死に方した人がいたんですか？」

「ええ、いたわよ。名前は佐藤和真っていうの。」

あ、知ってる。

女の子を突き飛ばして骨折させた直後に謎のショック死をして、つい最近ニユースに流れてた人だ。

何が原因でショック死したのかは不明らしい。

「その男は、道で女の子がトラックにはねられる！って思ってたその子
を突き飛ばしたんだけど、実はその車はトラックじゃなくてトラクタ
ーだったのよ！しかも速度なんてほとんど出てなかったから何も
しなくても女の子は避けられたのに、突き飛ばしたせいで女の子は足
を骨折。その後自分はトラックにはねられたと思って失禁しながら
ショック死。そのあんまりな死に方に搬送先の病院の先生たちや、あ
まつさえ自分の家族にまで笑われたのよ。プークスクス！」

……うわあ。

これは酷い。

ショック死の原因が不明、として流れていた理由が何となく分かつた気がする。

「さて、私のストレス解消も出来たことだし本題に戻るわよ。」

人の死に方でストレス解消しないでほしい。

というか本題に戻るとかいつているけど、そもそも本題に入ってる
らないと思う。

「私は水の女神アクア。日本で若くして死んだ人々を導いている女神
アクアよ。相川愛さん、死んだあなたには3つの選択肢があります。」

選択肢？

「1つ目は、肉体を捨てて天国的なところに送られる。2つ目は記憶
を失って、同じ世界で次の生を受ける。まあ、このあたりが妥当です
ね。」

……天国的って何よ？

でも2つ目より良いかもしれない。

記憶を失って次の生を受けるといふのは、どこか忌避感がある。

肉体を捨てるのも嫌だが、記憶よりマシだろう。

「あつ、天国的なところを選択するのなら気を付けてね。体がない上に、娯楽も特にならないから、やることと言えば日向ぼっこか、他の人とおしゃべりするくらい。もちろん、えつちいこともできないわ。」

「……なんつ、ですつて！」

処女も捨ててないのに、それはいやだ。

自分で言うのはなんだが、見た目は良いのだ。

175センチという長身ながら、かなりの回数を告白されているくらいには良いのだ。

けれど、ワキガ（強烈）のせいで、これをすべて断ってきた。

バレるのが怖くて、恋の1つもしたことがない。

「……天国も次の生も嫌です。」

「そうよね。ワキガのせいで恋ができないまま死ぬなんて嫌よね。そんなあなたに、実は良いはなしがあるのよ。」

良い話？

私が恋ができなかった理由を何故アクアが知っているのかはとりあえずスルーして、彼女の言葉に耳を傾ける。

「実は最後の選択肢に、（異世界に送られる）ってものがあるの。これを選べば記憶を失うことも、肉体を失うこともないわ。」

異世界？

そんなもの本当にあったんだ。

「……えつと、その異世界と言うのはどんなところなんでしょうか？」

「大体で言うと、RPGみたいな世界かしら？ 科学技術は中世ヨーロッパくらいだけど、魔法がある分そこまで文明レベルは低くないわよ。」

「そんなところに行けるの!？」

「ええ、そうよ。」

ゲームやアニメで、ちよつと憧れていたファンタジー世界に行けるなんて！

あれだろうか？ 意外と自分についているのだろうか？

「でも、そんなに喜んでいられる選択肢ではないの。」
えっ？

「実は異世界では〔魔王〕とか、〔モンスター〕とかがいてね。こんな選択肢があるのは、日本で若くして死んだ人たちに魔王討伐をお願いしたいからなのよ。」

………？

「魔王と言うと………強いですよね？」

「そうでなければこんな選択肢はないわよ。けど安心して。」

そういうと、アクアはこちらにカタログをよこし――

「わかった。長ったらしいのはもう無しだ」

はなが長いので切らせてもらう。

「要はあれか？愛さんはカタログのチートを選ばず、この女神を連れてきたってわけですか。」

めぐみんとダクネスに、知り合いが来たのでちよつと席を外すと
言って、アクアと愛と言う女性を別の席に連れてきた俺は、この状況
の事情を聞いていた。

あまりにも二人の説明が下手で長ったらしく、そして一応どういう
状況なのか分かったので、話を切った。

「はい。カタログの中のどんなものより、女神自体を連れてくる方が
安心かなって思って」

「ほんつといい迷惑なんですけど！私戦う力なんてないし、癒す力し
かないのよ？この巨大ワキガ女ほんつとありえないんですけど！」

「………すいません。でもその呼び方やめてくれませんか？」

「やめて欲しかったら私を楽しませて！私女神よ？女神にふさわしい生
活を保障して！」

………うん。

こいつ連れてこなくて良かった。
だがこのままでは愛さんが可愛そうだ。

同じ恥さらしな死に方をした人間として、どうも見過ごせない。

「おいアクア、楽はさせられんが、一応の生活ぐらいなら保障は出来るぞ。」

「えー、私楽な生活がしたいんですけど。」

「……コイツ人生舐め腐っているにも程がある。」

「あのな、この町の冒険者は大抵、馬小屋で寝泊りしてんだぞ。大衆浴場を利用する金だつて安くない。俺達はその中で、一応宿暮らしで生きるくらいに金が稼げている。お前は馬の糞の臭いがする馬小屋で寝泊りしたいのか？」

そう、俺たちは宿をとって生活している。

前、俺が住んでいたボロ宿ではなく、大きい部屋が特徴の宿だ。

もちろん、無駄遣いは出来ないの、同じ部屋にみんな泊まっている。

そこで気づいたのだが、めぐみんは、ちよむすけと言う名前の猫を飼っていた。

今までは、別の宿で住んでいて、そこで飼っていたらしい。

何故宿暮らしが出来ていたのかと聞けば、なんでもこの町に来る際に、馬車が上級悪魔に襲われそれを爆裂魔法で退治した際、馬車の主がお礼にしばらくの間、質のいい宿で暮らせるよう手配してくれたそう。

「そんなのいやよー！」

「なら愛さんへのその呼び方はやめろ」

「……わかった」

アクアは、しびしびといった表情で首を縦に振る。

「あの、カズマ君、ありがとうね」

愛さんがホツとしたように言う。

「構いませんよ。流石にあの呼ばれ方はきついですよね。」

同じバカな死に方をしたものとして、謎の近親感もあったし。

「それでさ、少し頼みがあるんだけど」

愛さんは窺うように聞いてくる。

「なんですか？」

「……私も宿に泊まらせてくれませんか？」

なんだ、そういうことか。

「なら別に構いませんよ。……ただ、大きい部屋を1つ借りているだけだから、俺を含めて5人で住むことになるし、狭いかもしれませんが。」

愛さんは男と同じ部屋で寝るのに抵抗を少し覚えたのか少し思案する表情になったが、

「別に構いません。お願いします。」

結局、首を縦に振った。

第6話

「それじゃあ愛さん。冒険者カードの作製をしましょうか」

「冒険者・・・カード?」

何を言ってるのかわからない、という風に小首をかしげる愛さん。そういえば俺のようにネトゲ廃人でもない、普通にゲームやアニメが好きな愛さんにとって、ファンタジーとはなんとなくイメージできるくらいのものなのだろう。

もしかすると、冒険者という単語も初めてかもしれない。

そう思い、この世界について明るいであろうアクア（なんかコップ置き場のコップで遊び始めた）は放っておいて、俺は冒険者カードやこの世界について、いろいろと愛さんに説明することにした。

☆☆☆☆

「カエルは縦横2メーターを超えます」

「からかっているの?」

「ならよかったんですけどね。」

「・・・本当に?」

「マジです。」

その真剣な表情から嘘ではないだろう、あり得ない事実には愕然とする。

冒険者や冒険者カードについてカズマ君に教えてもらった私は、次にこの世界の常識について教えてもらっていた。

主な信教はエリス教で、エリスは国の通貨になっていること。

初級より強い魔法は、街中で撃ってはいけないこと。

このあたり、ルールや信教の部分は、特に抵抗もなく聞けていたのだが・・・

「い、いやカエルでしょ?あの小っちゃくてゲロゲロな・・・」

「違います。大きくてベロベロです。ついでをいえば、舌巻きつけて丸呑みです。」

「・・・そう。・・・やだなー。」

生物に関する話になった途端、抵抗アリアリである。アホな子供が考えたようなめちやくちやな設定が、そのまま現実になった感じた。

悪い夢でも見てるのかと何度も頬をつねってみるが、

「……痛い。」

これが現実なのだとは分らない。

いったい誰得なのよ、そんなカエル。

天敵の蛇はおろか、動物すら食べられそうだ。

まさかこの世界では、カエル＜動物、という式が成り立っているの？

戸惑う私に、カズマ君は悲しげに

「バナナは川を泳いで、サンマは畑で育つんですよ。」

……あれー、おかしいなー。

二つの主語が反対になってるぞーwww

「カズマ君、主語が「これであってます。」

やだそんなの。

「ねえカズマ君、なんでバナナは頑張って泳ぎ始めたの？木から養分貰って満足してたじゃない。そしてどうしてサンマは怠けて土の中に潜ったの？彼こそ頑張って泳ぐべきだと思うのよ、私」

「愛さん。サンマは土の中に潜ったんじゃないやなくて、茎から咲くことを選んだんです。」

さく？策……じゃないし……作も違う。

まさか……咲く!?

は!?

「ねえカズマ君、常識ってどこにいったの？職務放棄してると思うんだけど、私。常識にちゃんと仕事してって、言ってくれない?」

仕事って大事。すごく大事。

ニートじゃ社会が回らない。

働いてくれないと困る。

ニート、ダメ、ゼツタイ!

「この常識はちゃんと働いていますよ。これで平常運転です。」

前言撤回！

ここの常識なんてリストラよ!!

ニートになってしまえ!!!

・・・はあ、それにしても

「一体何なのこの世界。ホントふざけてるのね。」

「そうなんですよ！わかりますよね！俺はただ普通に冒険して、普通に戦って、普通に恋愛したいだけなのになんでこんな無駄設定が多いんですかね!?!それにほら見てください、この光景、なんかおかしくないですか?」

そういつてカズマ君は、向こうで食事をしている人たちを指さす。

私は急にテンションが高くなったカズマ君に少し引きながら、それと同時に、カズマ君が取り乱し始めたせいかわりに少し落ち着いて、その光景を見る。

すると、

「なんか、キャベツだらけ?」

皿に盛られた野菜炒めは、基本緑色。そして緑のほとんどがキャベツ。

他にもキャベツの千切りに肉のキャベツ巻き、キャベツのスープ。

何もかもがキャベツだった。

「そうなんですよ！実は今日ーーーーー」

要約すると、今日はキャベツの収穫祭で、空飛ぶキャベツたちを捕まえた。

しかも経験値が豊富で一つ一つの値段が高く、ジャイアントトード討伐より稼ぎやすい。

その上、不思議なくらい旨いところが腹が立つらしい。

よほど気に食わなかったのか、それはもう熱演してくれた。

キャベツが空を飛ぶとか聞き捨てならないセリフを言っていて、どういうことか聞こうとしたのだが、それを聞く前に今度はまた別な愚痴を言われた。

相当ストレスが溜まっていたのだろう。

やれ、仲間が問題児だ。やれ、仲間が爆裂娘だ。やれ、仲間がドM

の変態女だ。など、まくしたてるように言ってきた。

そんな人たちとこれから寝食を共にすることに一抹以上の不安を覚えながらも、アクアよりはずつと良いといつていたため、ひとまずその心配は直接会ってからすることにした

「・・・すいません。愚痴につき合わせちゃって」

いいたいことを言い切ったのか、落ち着いた口調になるカズマ君。「別にいいのよ、これから厄介になるんだし。」

なんとなく今まで苦勞してきたのが分かってしまったため、愚痴もなんとなく許せた。

「そうですか、ありがとうございます」

カズマ君はほつとしたように、安堵の顔を見せる

「じゃあ、そろそろ冒険者登録に行かない?」

これ以上摩訶不思議生物たちの話を聞くと、頭がおかしくなりそう。

そう伝えるとカズマ君は

「そうですね」

と返してくれた。

そうして私たちは、大量のコップでドラゴンを完成させていた（呆れるくらいにアートな）アクアを連れて、受付に行くことにした。

☆☆☆☆

アクアがアークプリーストというすごい職業になり、ギルドの方々から激励を受けた後。

私はステータスカードに記載されたなれる職業一覧の中で、妙なものを発見する。

それは、

「キックランナー?」

すると受付嬢のルナさんは、驚いた表情を見せた。

「キックランナーといいましたか、愛さん?」

「え、あ、はい。」

「キックランナーは、敏捷性だけならほかのどんな職業より優れてい

るんです。その分、高い敏捷性と生命力、筋力もある程度要求されるため、滅多になれる人はいないんですよ」
「そうなんだ。」

まあ、確かに高校生になってからは、毎日毎日走ることとトレーニングばかりやってきたから、キックランナーに必要なとされる項目は、高くなっているって当然か。

……女性としてあまり喜ばしくないな、これ。

「じゃあ、キックランナーについて詳しい説明をしてくれますか？」
「とりあえず聞いておく。」

「はい。先ほども説明したとおり、キックランナーはとにかく速いです。戦い方はその速度を活かして敵の攻撃を躲しながら、走る勢いを乗せた美しい蹴りによって敵を打ち倒すのが一般的です。武器は足にメタルブーツ、予備に短剣を持つておくのがセオリーですね。」
なるほど。

結構かっこいいかも。

「取得すべきスキルは〔流走〕と〔星走〕というスキルですね。〔流走〕は文字通り、流れるような美しい走りができるようになるスキルです。走ることによる体への負担がちいさくなるため、スタミナ切れの心配が大きく減ります。〔星走〕は、しばらくの間敏捷性を大きく上げるスキルです。このスキルを使っている間、足が少し輝いて、星のように美しくなるため“女性として”も嬉しいスキルですよ。」

……いいっ！

これいいっ！！

流れるように走り、華麗に攻撃を避け、輝く足で美しく決める。
なんて良いんだろう、キックランナー。

ワキガ対策の努力が、こんなところで、こんな形でむくわれるなんて！！

「これにしますっ！これがいいです！」

「はい。分かりました。キックランナー……っ。では愛さん。ギルド職員として、あなたの未来に栄光があることを期待しています。」
こうして私は、キックランナーとして第二の生を受けることになっ

た！

第7話

「おいアクア、アイさん、俺の仲間のところに行く・・・きます・・・？」
冒険者登録が一通り済み、仲間の元に行こうと二人に声をかけたのだが、

「なに、カズマ？あんた言葉遣いが滅茶苦茶よ？流石はヒキニート、教養つてもものがないのかしら？」

アクアが馬鹿にするように言ってくる。

そしてアイさんも不思議に思ったのか、「どうして？」とばかりに、首をかしげながらこちらを見てくる。

「ちげーよ、だれがヒキニートだ。お前にはため口でいいけど、アイさんはそういう訳にはいかないだろ。両方に話しかけんのに、どっち使えばいいか分かんなかったただけだ。」

「ちよつと待ちなさい、あんた私を誰だと思ってるの？女神よ？女神に敬語は使って当然でしょ、悩む余地なんてないじゃない。そういえば、なんで愛には敬語使って、私には使ってないのよ。おかしいじゃない。」

当然とばかりに言ってくるアクア。

しかし、

「いやだって、お前って見た目的に俺と歳変わんねーけど、アイさんは俺よりたぶん年上だろ？それに、アクアには品はないけど、アイさんにはちゃんとするし。同じように扱うのはおかしいだろ？」

こいつに敬語はなんか嫌だ。

「はああああ!?女神よ、私女神！聖なるオーラを身にまとう、水の女神アクアよ！気品なんて存在するだけであふれてくるの！なんでそんな私よりワキガ女のほうが痛いっ、って、なんで拳骨打つんだよ!？」

「お前忘れたのか？アイさんにその呼び方するなって、次言ったら、同じ宿に泊まらせないからな。」

「う、う~~~~っ」

言い返せないのか、そんな声を出して、目を潤ませながら睨みつけるアクア。

散々バカにしてくれたこのくそアマをこんな風にできるとは、なんともまあ、気持ちがいい。

そんな風に悪い笑みを浮かべていると愛さんが、

「あの、カズマ君。私には別に、ため口で構わないからね。」
と、いつてきた。

「良いんですか?」

「いいの、だってアクアにだけそんな口調で、私にそんな気を使われるの、なんか嫌だし。」

「・・・ならそうするよ。じゃあこれからよろしく、アイ」

「こちらこそ、よろしくねカズマ君。」

そうして愛と俺は握手を交わす。

すると、

「ちよつと、いつの間にアイまで私に敬語使わなくなったのよ。」

アクアが非難がましくそういつてきた。

「だって、さっきのカズマ君とアクアのやり取り見ていたら、本当に威厳もなにも無かったし。見た目的に年下そうだからもういいかなつて。」

「よくないわよつ。何度も言うけど、私女神!あらゆる生命体の頂点!敬われるのは当然なのよ!」

そんなアクアの発言に、俺とアイは互いに顔を見合らし、

「ていう夢を見ていたのか」

「むきーーーーーっ!!」

「ちよ、へんなとこ叩かないですよ!」

「おい、ツこ、こら暴れんな!落ち着けつ、悪かったよ。それに、明らかに俺と同じ年で、アイより年下に見えるお前が敬語なんて使われてたら、周りのやつが不振がるだろ!」

「・・・確かに」

叩く手をとめ、顎に手を当ててようやくおとなしくなる。

「ようやく止まったか。いいか、これはお前の正体を隠すためだ。この世界でも、お前ぐらいはつきりとした青髪なんて見たことがない。それに見た目も良いからな。そんなお前が、同い年や年上に敬語を使

われてみる。絶対変な勘繰りする奴が出てくるからな」

「・・・それもそうね、なら我慢してあげる。この寛大な私に感謝なさい」

なぜか上から目線なのが腹立たしいが、とりあえずほっとこう。

俺たちはそのままダクネスとめぐみんの元に向かう。

「遅かったじゃないかカズマ、ん？そちらの方たちは確か、」

到着と同時に、ダクネスが聞いてきた。

「俺の知り合いの、アイとアクアだ。二人には急で悪いんだが、二人を仲間に入れたいと思ってる。」

「本当に急ですね。私としては、爆裂魔法が打てればそれで構いませんが。」

仲間が増えるというのにこの反応。相変わらずというか、実にこいつらしい。

爆裂に支障がなかったらたいいのことはオーケーなのだろうか？

「私も別に構わんど。あとはクリスだが、まあ、いいだろう。あいつならオーケーしてくれるだろうし。では愛とアクアだったな、二人はどんな職業なんだ？」

ダクネスは表向きは落ち着いて、けれど仲間が増えるのが嬉しいのか、そわそわしている。

たしかこいつは昔、いろんなパーティーに断られていたらしいから、仲間が増えるのはこいつにとってありがたい話なのかもしれない。

そういえばクリスは、なんでこいつの仲間になったんだろう？

見張つとかないとすぐモンスター群れに突っ込もうとする変態なのに。

確かに盾としては優秀だが、普通のパーティーに入ってダンジョン探索をしていたほうが、よほど効率的に金を稼げるだろう。

気のいい性格ではあるが、クリスはお宝が結構好きで、お金も好きなのだ。

もちろん困っている人よりお金を優先するような奴ではないが、馬鹿な悪評のあるダクネスとわざわざパーティーを組もうなんて、まともな神経をしてれば思わないはずだ。

もしかすると、二人は幼馴染だったりするのだろうか？

「おいカズマ、なにをぼーっとしてるんだ？」

「えっ、？」

一人でそんなことを考えていると、ダクネスが声をかけてきた。

「い、いや、ちよつと考え事をな」

こいつに対しちよつと失礼なことを考えていたため、どこかバツが悪い反応になってしまう。

「そうか、ならいいんだ。」

それだけ言うと、ダクネスは席に座り、座っていた残り三人とテールを囲み談笑し始めた。

どうやら俺が考え事をしている間に、自己紹介を終わらせたようだ。

アイがめぐみんとダクネスに苦笑いを向けているのが良い証拠だ。どうせ中二病と、変態発言をそれぞれぶっ放したのだろう。

まったく、少しは自重ができないのだろうか。

「ねえ、カズマ君。そんなところで立ってないでこっちにすわりなよ。」

アイはそう言って、自分の隣の席をポンポンと叩く。

「じゃあ、遠慮なく。」

おれは言われるまま、アイの隣に座る。

この後俺たちはたくさんの料理を頼み、お祝いパーティーをして宿に帰った。

お祝いパーティーにクリスがいればもっと良かったのに、なんて考えながら。